



NO. 173

# 響音 (ひびき)

発行 チャイルドライン ハートコール・えひめ  
〒790-0808 松山市若草町 8-3  
松山市ボランティアセンター気付  
Tel 089-923-9558 Fax 089-916-9710  
E-mail heart-call@kke.biglobe.ne.jp  
http://www7b.biglobe.ne.jp/~heart-call/  
発行責任者 染川まどか  
発行者 染川まどか  
編集者 三好久恵

## 12月エリア Zoom 研修

2021年12月18日(土) 13:00~15:00 (参加者16名)

講師 石井志昂氏 (不登校新聞社編集長)

<http://www.futoko.org/>



## テーマ 当事者が求める救われた対応

### ◆参加者の感想

- ・石井さんのお話を聞いて、子どもの話を聴く事がいかに大切さを改めて感じました。受け手として、ただ聴くだけで良いのかと疑問に思うこともありますが、それで良いんですね。(I)
- ・石井さんのお話、皆さんのお話、「普通の日常がつくづく大事だな」と感じさせられました。少しでも子どもと一緒に考えること、子どもの自己肯定感を前にすすめるように心がけることを頭に置きながら活動していきたいと思います。(H)
- ・「聴く事」と「聞き出す事」は全く違うのは、頭では理解しているつもりでも、自分の場合気を抜くとすぐ聞き出そうとしてしまっているかもしれない。相手の事を理解して話を聴きたい思いがそうさせるのだろうが、私にはその加減がとても難しく感じる。不登校の経験者アンケートでは、聴いてもらえることが、一番嬉しかった事、との結果だったので、自分の「聞き出したい」気持ちは一旦置いて、聴く事を心がけようと思った。難しいけど。自ら不登校経験者の石井さんのお話を聞いて、当事者だからこそわかる気持ちを感じることができました。(S)
- ・不登校で一番苦しんでいるのはその子ども自身なんだということを今更ながら理解できたような気がします。大人の立場ではこの子をなんとかして再び学校に行けるようにしてあげたいという気持ちがわいてくるのは仕方ないと思いますが、それを前提にして対応するとさらにその子を苦しめるのではないかと思います。チャイルドラインの基本方針の一つである「子どもが主役」を忘れず、傾聴に徹することが大事だと感じました。この気持ちを今後の電話対応に活かしていきたいと思います。今回の研修では各団体ごとに意見をまとめる機会がありましたが、日頃接する機会が少ない他団体のメンバーとも交流することができたらとも感じました。(K)
- ・当事者である石井さんの話はとても心に響きました。石井さんの「不登校によって自分のなかの軸のようなものが練られたような気がしています。」という所をもう少し深く聞いてみたいと思いました。ほめる子育てより聴く子育て、なるほどと思いました。



本人の気持ちより先に出ないとか笑顔になっている瞬間を見逃さず共有する、興味を持っていることを理解するように教えてもらう、手紙は割と有効など大変勉強になりました。不登校の人が救われたと言った対応についてブレイクアウトルームでの話し合いはとても新鮮でした。気持ちを聞いてくれた。感謝された。好きにさせてくれた。本当に傾聴するためには心も頭も真っ白にしなくてはと改めて思いました。(K)

・「雑談をしたい」のお話し、目からウロコ、胸にストンと落ちました。子どもが生まれた時、それだけで嬉しかった。そこに居てくれるだけでOKだった。私はいつの間にか、あれもだ、これもだと背負わせていたのかもしれない。初心に帰って「愛する」という事を考えてみたいです。(O)

## 1月エリア Zoom 研修

2022年1月15日(日) 10:00~12:00 (参加者12名)

講師：伊藤次郎氏 (OVA代表ソーシャルワーカー精神保健福祉士)

NPO法人OVA(オーヴァ)の公式ホームページ([ova-japan.org](http://ova-japan.org))



## テーマ 「助けて」と言えない子どもたち～NPO法人OVAの活動から～

NPO法人OVAは、「助けて」が受け止められる社会を目指して活動している団体です。インターネット上で「死にたい」等自殺をほのめかず関連用語を検索している人に対して、検索連動広告を表示し、インターネット相談につなげる活動をしています。メールやチャット、LINE、電話、対面など支援方法があり、積極的に継続的に関わりを持ち支援している団体です。

10代の自殺死亡率はほかの世代と比べて低いものの減少しにくく、2020年では過去最多となっている。では、なぜ子どもは「死にたい」に追い込まれるのか？ 子どもを取り巻く様々な「生きづらさ」があり、自殺に至るのは複数の問題を抱えて追い込まれることがわかった。「孤独だ・居場所がない」と「自分は生きる価値がない」「自分は迷惑な存在だ」「周囲の人の重荷になっている」という思いにとらわれ、「死ぬしかない」という心理的視野狭窄に陥っている。「生きたいけど死ぬしかない」そして、「死にたい」と「生きたい」で揺れ動いている。「死にたい」という訴えの背景には、「助けを求める気持ち」と「助かりたくない気持ち」が同時に存在している。自殺は「追い込まれた末の死」といえるが、自殺するまさに直前まで「生きたい」「死にたい」の間で揺れている。誰かが「かかわる」ことで「生きる」を選択することもある。



## 子どもの「死にたい」にどう対応するか？

### TALK の原則

- ①Tell 子どものサイン (SOS) に気づいたら言葉に出して心配していることを伝える。
- ②Ask 「死にたい」という気持ちについて、率直に尋ねる。
- ③Listen 絶望的な気持ちを傾聴する。本人の気持ちを尊重し、耳を傾ける。
  - ・まずは、話せる環境をつくる・心配していることを伝える・悩みを真剣な態度で受けとめる
  - ・誠実に、尊重して相手の感情を否定せずに対応する・話をきいたら「話してくれてありがとうございます」や「大変でしたね」「よくやってきたね」というように、ねぎらいの気持ちを言葉にして伝える。
- ④Keep safe 安全を禍確保する。自殺手段への接近を取り除く。

### 「死にたい」と打ち明けられた時やっていいこと、いけないこと

#### やっていいこと

- ①打ち明けた人は“あなただから打ち明けた”ということを知覚する（深刻な悩みはだれでも人を選んで相談する）
- ②聞き役に徹的にまわる
- ③共感する（「つらかったね」）

#### やってはいけないこと

- ①話題をそらす
- ②社会的一般的な価値観をおしつける
- ③叱りつける
- ④批判をする
- ⑤質問を連発する

支援者もまた危機的な状況に陥りうる。そのことを自覚するためにもスーパービジョンが必要となる。自殺の危機にある人を、ひとりだけの力で支え続けることは難しい。チームで支えることが大切。

### ◆参加者の感想

NPO 法人 OVA は危機的状況のある人により積極的にインターネットというだけでもアクセスしやすいツールを駆使して、発しにくい「助けて」という声をキャッチして救う、ハードな活動をされていると思いました。私たちチャイルドラインは、少し緩やかに子どもが「助けて」と言い出しにくいけど、発信してくれたらその言葉を逃さず、受け止めるために活動していると思います。また、日ごろ、「助けて」という SOS を出してもらえそうな信頼できる大人として緩やかにつながり続けることが大切だと思っています。チャイルドラインの活動も、子どもが安心して「助けて」と言える“心の居場所”となれるよう日々努力していくことが大切だと感じました。(N.S)

### リーフレット配布

#### 中四国エリアチャイルドライン 24 時間キャンペーン いまの気持ち、聴かせて！

11/20 (土) 午後 4 時～11/27 (土) 午後 4 時まで  
24 時間 1 週間キャンペーンのリーフレットを県内高校中学小学校に配布しました。件数・電話の内容・団体受け手の感想などの統計とともに、通常開設以外の時間帯着信数もあり、今後のキャンペーンに向けて検討していきたいと思えます。



## ハートコール・えひめの 20 年 パート 5

今回は電話をとっている場所についてです。今の場所は3度目、2度の引っ越しをしました。最初にも書きましたが、子ども電話を立ち上げようとした時、自慢ではありませんが何一つ、鉛筆1本ありませんでした。もちろん場所などあろうはずもなく、どうしたものかと5人は頭を抱えました。とにかく5人の周りを思い当らうと、要するに、つてこねを何としてでも使おう、全く友人知人には迷惑な話です。それでもありがたいことに賛同してくださる方はあり、最初の場所お寺の1室をお借りすることになりました。少し床を修理していただき、家賃光熱費はなしで開設できました。

しかし、色々な諸事情で1~2年で退所せねばならず、また無理やりのつてこねです。今度は昔からの知り合いで当時市議会議員（現県議会議員）が「事務所が広くてもったいないのよ、誰かシェアしてくれないかな」即座に「お願いします」です。ちょうどその時、別の知り合いが「ある会社が倒産して、事務所用品・機材をすぐに取りに来てくれるならあげるって」と教えてくれました。こんなチャンスってあります？また無理やりの発動です。すぐに少ないスタッフ・家族・軽トラを出し、「これいるね、あれもいるね」と色んなものに紙を張り付けて、どこからこんな力が出るというくらいの勢いで運んでいきました。「誰？こんなものまで」それは給食で使うような大きなヤカン「これはいらんやろ」でも事務所を間仕切る衝立はありがたかったです。

しかし、諸事情はつきもので9年続いた家賃光熱費なしの活動から一転、不動産をめぐるはめとなりました。2万円位で事務所をとという願いはどこでも鼻で笑われ、途方に暮れていると、漫画のようですが、目の前のスタッフが「古い小さなマンションを持っていて、借主がいなくなってしまうとどうしようと」即座に「お願いします」です。

ご主人が「何か協力をしたいと思っていたが、こういう形で出来るとは。こちらもボランティアしているようで嬉しいです」と言っていただき、涙が出そうでした。家賃は半額で、壁も天井も床もきれいにし、今あるテーブル・椅子・本棚は使ってくださいとまで。どれほど感謝しても感謝しきれません。

こうして今現在に至っています。3度の場所はどれもご厚意でお借りしてきました。子どもたちの声を聴くという活動を理解し賛同しご協力くださったと思っています。どんなに思いが強くても一人では出来ません。たくさんの周りの方のご協力があったからこそ続けてこれたのです。継続の力は周りの方々から頂きました。ありがとうございます。次回のとんやわんやは泣き笑いのバザーです。またお付き合いください。

## 編 集 後 記

今年度も大きな行事も出来ないまま、それでもスタッフに感染者もなく、無事1年過ごせ、開設も途切れることなく出来たことは、何よりありがたいことでした。

私はといえば、6年前脳梗塞を発症し要介護2の夫と、2年前から色々な事情で3人の孫がしょっちゅう我が家にいることは、私の脳トレ、筋トレ、ボケ防止と思ひ、しかし、スタッフには大変な迷惑をかけながら過ごしています。皆さんの優しさに甘えながら、自分の出来ることを少しでも頑張ろうと思っています。

日常が戻ってくることを心より願っています。

来年度もどうぞよろしくお願いたします。（染）

